

→「火垂るの墓」の記念レリーフと神戸市立御影公会堂

2018. 6. 10(日) カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第 535 回 参加報告

公会堂の「記念コーナー」の嘉納治五郎は、この公会堂建設を後押しした嘉納治兵衛一族の人で、講道館柔道の創始者であり、“柔道の父”とも、呼ばれています。1909年、東洋初の、IOC委員となり、苦勞の末に1940年の東京オリンピック招致に成功しましたが、戦争の激化により、このオリンピックは開催出来ませんでした。この快挙が1964年の東京オリンピック(第18回夏季)、そして来る2020年の東京オリンピック(第32回夏季)に繋がるといふことのように。



ひとでなし



御影公会堂

公会堂見学の前に、講師の横井先生に、野坂昭如作『火垂るの墓』と『ひとでなし』の、講演をして頂くのですが、御影公会堂の管理人の一人が、この部屋の、次の利用者の使用開始時間が迫っていると行ってきて、昼食後に部屋へ戻って、講演をして頂きました。

野坂昭如が、少年時代、阪神間の六甲道に住んでいた時、空襲に会い、逃げまどい、福井県坂井郡春江町(現、福井県坂井市)に疎開し、食糧不足で、妹を死なせてしまった。『ひとでなし』は、そんな実体験を、元にした作品だと知りました。そして、妹を死なせてしまった贖罪の念によって、『火垂るの墓』が書かれた、という事などを、話して頂きました。私は、戦後生まれの、団塊の世代で、戦争は知らないですが、戦争が、弱者を、如何に痛めつけるかが、わかるような気がしました。

同作品をもとにした、高畑勲監督のアニメ映画“火垂るの墓”にも、御影公会堂は、出てきます。この公会堂の裏手が、一足先に自宅を出た母との待ち合わせ場所でした。その“二本松”は架空の情景か、後に焼失でもしたのか、今はありません。作品では、その後、母の遺体を救護所であり、遺体安置所でもあった小学校で兄妹は見付けます。実際には、母は一命を取り留め、病院で療養していますが、小説やアニメでは、この時に母は亡くなり、二人は夙川(西宮市)の親戚を頼ります。

公会堂の斜め向かいの石屋川公園に、アニメ“火垂るの墓 記念レリーフ”がありました。兄と妹の二人のまわりを、二人の精霊であるかのように、蛍が乱舞する絵が、嵌め込まれています。アニメ映画では、ラストシーンで、「埴生の宿」の切ないメロディーが流れます。

レリーフを、見ている、この場面にも合うメロデーでもあるな、と思いました。

さて、台風の前兆でしょうか、空が小雨になって、私たちは、野坂昭如が実際に通学していたという成徳小学校へ向かいました。野坂氏は、元々は六甲道駅の北側、中郷町に住んでいたそうですが、この小学校へ通学させるために、お父さんが駅の南側になるこの辺りへ引っ越したことが『ひとでなし』で明らかにされています。



石屋川公園 記念レリーフにて

JR「六甲道」駅の駅前公園からは、北に向かえば「六甲道」駅、南に向かえば阪神「石屋川」駅で、ここからは、それぞれ帰路の便利な方へ…。台風雨が、本格的にならないうちにと、今日はいつもより1時間は早い時間でしたが、2時頃に解散しました。

<報告：池内 洋>